

次の文章は、十二月二十一日に国府（国司の役所が置かれた町）を出発してから一か月後、一月二十日の記述である。この時、作者の一行は、室津という港（現在の室戸岬の北西）に停泊中であつた。

二十日の夜の月出でにけり。（注1）山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、昔、（注2）

阿部仲麻呂といひける人は、（注3）唐土に渡りて、かへり来ける時に、舟に乗るべきところにて、かの国人、（注4）

馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの（注5）唐詩つくりなどしける。**あかずやありけむ**、二十日の夜の月出

づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂の主、「わが国にはかかる歌をなむ神代より神も（注6）よん給び、今は上中下の人もかうやうにわかれ惜しみ、喜びもあり、悲しびもある時にはよむ」とて、よめりける歌、

青海原ふりさけ見れば（注7）春日なる

三笠の山にいでし月かも
とぞよめりける。

かの国人、聞き知るまじく(注き)おもほえたれども、こ
との心を男文字に、さまを書き出して、ここの言葉つた
へたる人に言ひ知らせければ、**心をや聞きえたりけむ**、
いと思ひのほかになむめでける。唐土とこの国とはこと
ことなるものなれど、月の影は同じことなるべければ、
人の心も同じことにやあらむ。さて今、(注り)そのかみを
思ひやりて、ある人のよめる歌、

都にて山の端に見し月なれど

波より出でて波にこそ入れ

(注)

- 1 山の端Ⅱ山の上部で、空と接する部分。稜線。
- 2 阿部仲麻呂Ⅱ奈良時代の遣唐留学生。三十余年の滞在の後、帰国しようとしたが、海難などの事故で帰国できず、在唐のまま客死した。
- 3 唐土Ⅱ中国の古い呼び名。
- 4 馬のはなむけⅡもともと「馬の鼻向け」の意で、古代、旅に出る人の安全を祈って、出発時にその人の乗る馬の鼻を行く先の方に向けたことから、旅立つ人に選別の金や品物を贈ったり、送別の宴を行ったりする意になった。
- 5 唐詩Ⅱ漢詩
- 6 よん給びⅡ「よみ給ひ」に同じ。
- 7 春日Ⅱ現在の奈良市春日野町一帯。藤原氏の氏神である春日大社があり、その東には三笠山がある。
- 8 おもほれたれどもⅡ「おぼえたれども」に同じ。
- 9 そのかみⅡその当時

二十日の夜に月が出た。山の端もなく、海から月が出てくる（ように見える）。このような月を見て（次のことを思い出す。）

昔、阿倍仲麻呂という人は、唐に留学で渡って、日本に帰るとなつたときに、船の乗り場であちらの国の人が、仲麻呂の送別会をして別れを惜しんで、漢詩を作ったりした。それに飽き足らなかつたのだろうか、彼らは二十日の夜の月が出るまでそこに留まつた。その日の月は、海から出てきた。これを見た仲麻呂は、「私の国では、神代から神様もお詠みになり、今では身分に関係なく、このように別れを惜しみ、喜び、悲しんだりしたときにこのような歌を詠むのです。」と言って次の歌を詠んだ。

青海原をはるかに見渡したときに見える月、この月は私のふるさとの春日にある三笠の山の上に出る月と同じなんだよなあ。

あちらの国の人は、聞いてもわかるはずはないと思われたのだけど、歌の意味を漢字に書き直して、日本語を習って唐に教えている人に伝えたところ、歌の意味を理解できたのだろうか、思っていた以上に（歌を）賞賛した。唐とこの国（日本）とでは言葉は違っているものであるけれど、月の光は同じに違いないので、（それを見て感じる）人の心も同じことではないだろうか。（ということ）を思い出して、その時代のことを思いながらある人が詠んだ歌がこれである。都では月というものは山の端に見えるものだけど、ここでは海原から出て、また海原に沈んでいくものだなあ。